

日赤と看護大学は共同で、浪江町と協力して「いわき市内に避難している浪江町民の健康調査支援事業」を行ってきました。浪江町の馬場有町長に、本事業を日赤と行うに至った経緯、長期間続けられた活動に対する評価、町民の帰還が始まった町の将来への思いなどについてお話を伺いました。

場所： 浪江町役場町長室(福島県浪江町)
開催日： 2017年8月10日

大地震・大津波などの自然災害は自治体を預かるものとして起こりうるかもしれないという覚悟はしていたが、原発事故による放射性物質の拡散は考えたこともなかった事故だった。避難を開始してから10日ほど経ったころ、原発事故による避難は長期になると考え、これからは健康管理が最も重要な項目になると考えた。

町民の健康管理は町の診療所、開業医の先生にお手伝いをお願いしたが、診療所等は仮設役場(二本松市)の近くに建てたため、全国に避難した町民の対応までは手が回らなかった。そこで、日赤の組織力を活用して全国に避難した町民の支援・健康管理ができないかと考えた。避難が長期になるにつれ健康管理がますます重要になってきて、こころのケアを含めた健康管理を日赤に支援いただけないかとの発想だった。そのころ、看護大学の高田学長をはじめ関係者の方に良いタイミングでお会いした。心のよりどころとして、また最後まで支援いただけるのが日赤と思っていたので、理解していただき支援を継続いただいたことはありがたいことだった。

今回のように広域的・長期的に避難していると、避難先で孤立感が生じストレスが溜まってくるので、こころのケアが必要となる。避難先で精神的に病んだり持病を悪化させたりする人が多い。日赤がいわき市で行っている健康見守り調査活動では、地道に訪問を重ねることで顔見知りになり、胸襟を開いて話ができるようになり心が打ち解けてくる。そのことが健康にも精神的にも良い結果を生んでおり非常に助かっている。町の保健師も実際に一緒に訪問して、座学では得られない人材育成につながった。お互いに大きくなったようで次の機会に活かせる。

いわき市に避難した町民からは、避難先でも苦労があった話は聞いている。町民も地域に溶け込むために自分で地道に切り開く努力は少しずつしているとは聞いている。健康見守り調査活動においても、日赤の看護師からこの件についていろいろなアドバイスをいただいたことも承知している。

町民の帰還が始まったばかりだが、町が元のような状態に戻るのには相当の時間が必要だと思う。人口が震災前の21,000人に戻るのには不可能だが、帰ると言う人、戻っても良いと言う人が生活できる環境整備は最低限しなければならない。街並みを残す活動を積み上げていって、本当の街づくりができてくると感じられるのはずっと先かもしれない。将来、浪江町で生活ができるという状況だけは作っておき、日本の地図に「浪江町」という地名を残しておかなければならない。その使命が自分にはあると感じている。